

近代都市による問題群解決のための方法の考察

－東京圏・ベイエリア・船橋市浜町界隈を事例として－

日大生産工（院） ○北浦 佑季
日大生産工 広田 直行

1 はじめに

近代は、産業や文化の発達に適応した建築を生み出してきた一方、地域固有の文化や場所性が失われた。本提案は、地域再生のための様々な「拠点」を構築し、都市に人と場所の関係性を築き、近代化による負の遺産として壊されるのを待つ建築を、地域に対して新たな役割を持つ建築に更新することを目指す。

本稿では、近代化に至る歴史的背景より近代都市による問題群を抽出し、その解決方法を考察する。また考察対象地を「船橋ベイエリア」とする。対象地は、ベイエリアの物流の拠点を担う一方で、東京圏の住宅地を形成する。そして、船橋漁港や戦時中の疎開地のコミュニティがある。

本稿の問題群の解決方法をもとに船橋ベイエリアの拠点を整備し、修士設計として提案する。

2 近代都市の問題群の抽出と計画

近代化によって引き起こされた現代の問題群（検討資料：1-6）から以下の項目を抽出した。

- ・ 自然環境と都市の関係性
- ・ 交通インフラに分断されたコミュニティ
- ・ 情報革命による都市の目まぐるしい変化
- ・ 時代のニーズとともに変化する公共施設
- ・ 機能的ゾーニングによるかきい性の消失
- ・ 都市住宅の孤立
- ・ 都市の中の人の死の扱い方の変化

近代都市の欠陥であるこれらの項目群は、相互依存関係を持ち、複雑に絡み合っている。これらを設計と条件とし、計画に反映させる。

東京圏の構造（参考文献：8）は次のようにまとめられる（図1：図の番号は下記項目番号に整合）。

①「センター・コア」：東京圏の中心にあり、都心、副都心などが含まれる。日本の政治・経済・

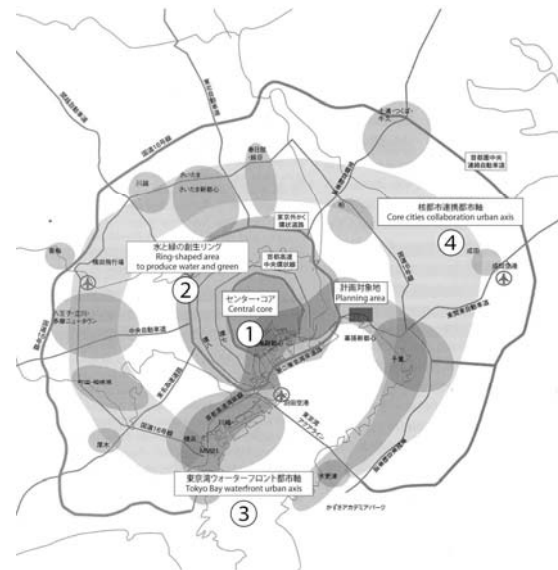
文化を牽引する中心核。

②「水と緑の創生リング」：センター・コアと合わせて職住近接を図ると共に、質の高い生活環境の形成を図る。

③「東京湾ウォーターフロント都市軸」：国際空港・港湾を通じた国内外の人、モノの交流拠点。

④「核都市連携都市軸」：核都市群を環状方向に結び付け、連携・交流軸、交通、物流、情報など環状方向のネットワークを強化する。

考察対象地は「東京湾ウォーターフロント都市軸」に位置する。



（図1）環状メガロポリスの構造

大都市が目指すべきは持続可能性であり、地域ごとに異なる特徴を持つ「拠点」が繋がり、東京圏を構築していくことであると考えられる。都市リノベーションは、「拠点」の更新と再生が目的となり、それぞれの街の固有性を活かした、都市の一部となる「拠点」構築が必要である。

Study of methods for solve the problem group by the modern city

－ A Case Study of the Tokyo metropolitan area , Bay Area , Funabashi Hamacho neighborhood －

Yuki KITaura , Naoyuki HIROTA

3 自然環境の中の都市のあり方

船橋ベイエリアには、ラムサール条約で保護された谷津干潟がある。干潟には多くの渡り鳥が生息し、ロシアや中国、オーストラリアへ移動する⁽⁹⁾。この現状は、人がつくりあげた都市の区割と動物の生態系を含めた自然環境の区割が全く異なる領域形成であることを示しており、その関係性は希薄である(図2)。

また、東日本大震災をはじめ、自然環境に抗えないことは痛感している事実であり、私たち人間は、自然環境から土地を借りて、都市を建設し住み始めただけなのである。都市に必要な機能を設けると同時に、自然環境保全の役割を持つための計画が計画対象地内の谷津干潟、東京湾に必要なだと考える。



(図2) 船橋ベイエリアでの自然環境
(海=青，植物=緑，茶=大地，を示している。)

4 「拠点」の意味

国交省による政策「国土のグランドデザイン2050」では、時代の潮流と課題から戦略を提示している⁽¹¹⁾。中でも「小さな拠点」「高次地方都市連合の形成」「スーパーメガリージョンの形成」をみると、都市の広域化・散逸化・多焦点化が次なる都市形態として提示できる。

船橋ベイエリアでは、埋立地に様々な公共施設が建設された昭和初期において、「都疎浜」～「船橋漁港」かいわいで、集落的なコミュニティを形成していた。船橋市の中心市街地には市場があり、「都疎浜」～「船橋漁港」～「船橋中心市街地」のエリアでコミュニティが形成され、地域を形成する重要な要素であった⁽¹²⁾。

しかし近代化による都市の機能的ゾーニングによりコミュニティは分断されている(図3)。



(図3) コミュニティが分断された計画対象地
(機能的ゾーニング(エリア色分け)と交通インフラ(赤線)を地図レベルで検討することで計画対象地におけるコミュニティの分断が確認できる。)

さらに、コンビニなどの利便性がコミュニティ全体と関わる必要性を減らしたのである。「何でもある・できる便利な時代」がこの土地に場所性・風土といったものを消し去り、資本主義社会の競争原理が支配する都市となっている。

都市の中に人と場所の関係性を取り戻すには、都市の中に潜在的に潜む集落的なコミュニティを見つけ出し、以前の場所性を引き継ぎ、コミュニティ形成のための拠点の整備が必要である。

5 計画対象地における「拠点」の決定

「国土のグランドデザイン2050」による目指すべき国土の姿から、リアルとバーチャルの2つの空間を前提にしていることがわかる。実物空間(「2次元的空间」)と知的・情報空間が融合した、「3次元的空间」のなかで、数多くの小さな対流が創発を生み、大きな対流へとつながっていく、「対流促進型国土」として述べている。

現代ではリアルとバーチャルの2つの世界で生活が成り立つ。歩きスマホやSNSによるコミュニケーションをみるとわかるように、バーチャルの世界が先行し、都市における人と場所の関係性が希薄になっているといえる⁽¹³⁾。

船橋ベイエリアでは、日々の営みの中の建物や町並みは人間の心の安定に欠かせない「過去の所産」として漁師町を中心に成り立っていた。その他「過去の所産」は、「船橋漁港」、保存

され残り続ける「谷津干潟」、時代の変化によって閉鎖された「オートレース場跡地」がある。

都市の中に人と場所の関係性を取り戻し、「抛り所」をつくるには、過去を遡り、歴史の延長線上に立つて最もふさわしいデザインとは何かを考える必要がある。スクラップアンドビルドのように、創造のための破壊ではなく、創造とともに何かを残していかなければならない。

6 地域再生の「拠点」としての公民館

公共施設の本質として以下のことがある⁽⁶⁾。

- ①基本的人権の保障
- ②公民性（citizenship）の涵養
- ③本源的な価値

船橋ベイエリアにある浜町公民館は、今まで住民の「日頃の居場所」として使われていたが、現状は非日常のイベント会場となっている。

公民館での交流の場が、現代では SNS にあり、時代のニーズとともに変化する公共施設の存在が、住民の「日頃の抛り所」として定着することが必要だと考える。船橋ベイエリアには、ららぽーとや IKEA などの商業施設があり、週末や休みの期間には、街に来客者があふれ、地元の人々の居場所がない。

住民の「日頃の抛り所」として浜町公民館を再生するには、住民の「生活拠点」となる必要がある。また住民のみならず外部の人にとっても近づきやすさ、利用しやすさを確保することで、船橋ベイエリアにおける来街者の為の「情報拠点」としての役割も担うことができる。

7 「拠点」と周辺環境（かいわい）との関係

ジェイコブスは機能的ゾーニングという手法が持つ活動禁止的な側面を浮き彫りにすることで、近代都市の欠陥として「かいわい性」の消失を訴えており、「かいわい性を生み出す四つの条件」として以下のようにまとめた⁽¹⁴⁾。

【条件1】混用地域の必要性：地区は、できれば二つ以上の機能をはたすことが望ましい

【条件2】小規模ブロックの必要性：たいていのブロックは短くなければならない

【条件3】古い建物の必要性：地区というものは建てられた年代とその状態のいろいろ違った建物が混じり合っていないなければならない

【条件4】集中の必要性：地域には人口が十分密に集中されねばならない

また、日本の都市計画家である石川栄耀の「都市広場」「盛り場」「夜」の概念について着目す

ると、駅前広場のような交通のための広場ではなく、人と人のつながりを促すような社会交歓のための広場が都市に「かいわい性」を取り戻すために必要である^(15,16)。

船橋ベイエリアでは、ららぽーとや IKEA の営業時間が終わると、閉園後のテーマパークのような雰囲気となる。つまり、計画対象地には外部から来る人のための施設によって成り立っており、住民の生活による「かいわい性」が生まれる場所がない。そのため「拠点」では、住民の生活拠点としての特徴を持たせる必要がある。

「人と人のつながり」を生む「拠点」を構築するためには、街区レベルの環境から考える必要がある。街区ごとのつながりが「国土のグランドデザイン 2050」でいう「小さな拠点」となり、拠点が連携することで小都市を形成し、やがては大都市としての東京圏を構築する。

8 住居と都市のあいだを繋ぐ「拠点」の意味

現在、都市部ではタワーマンションが多く建設され、居住空間を強固に閉じることで、セキュリティを意識した住居に変化した。この過程を見ると、現在の住居は穴蔵としての住居に回帰している。コミュニティに属することなく外敵から身を守るための穴蔵が積層されたタワーマンション等は黒沢隆により提唱された「個室群住居」を継承していない住居形態として「個室群的住居」と捉えることができる⁽¹⁷⁾。

「個室群的住居」では、本来の住居が持っていた、人々が自然や共同体とつながる「結節点」とはならない。そして諸施設は、都市に居るばらばらになった人々が、改めて都市の中で集まるための機会となっている。しかし私たちは、「住居」と都市の中の「諸施設」という2つの空間だけで生きているわけではなく、それらの間に広がる住居や諸施設としての形態を取らない空間でも生きている。住居と都市をつなぐ「拠点」を構築するには、自然との関係や街のコミュニティ、その蓄積による場所の記憶を欠いた空間ではなく、長い年月をかけてつくられる場所としての「結節点」でなければならない。

9 都市の中の慰霊空間のあり方

葬儀の主体が、地域共同体→家→核家族、やがては個人にまで行き着くことになる。また命の落ち着き場所においても、神仏→自然→家・先祖→核家族→個人の思い、というように矮小してきた。人の死に対する考え方・接し方は多

様化し、さらには命の落ち着き場所が個人の思いによるものになっている⁽²⁰⁾。

都市の中で生まれ育ち、都市が故郷となった人々が、いつまでも故郷とつながるための慰霊空間として、イギリスの「ベンチ」の存在が挙げられる（写真1）。イギリスでは、街のベンチにメッセージが入っているものがあり、故人を想う気持ちが込められたベンチである。故人の家族や友人が故人に話しかけたり、若者たちの新たな出逢いが生まれる場となる。いつまでも、そのベンチから愛する故郷と愛する人達を見守っていくことができるための計画である。



（写真1：イギリスの公園のベンチ）

友人と語らう場所、待ち合わせの場所、ポーズの場所、けんかした場所、故人を偲ぶ場所。それぞれ場所で起きたことが人それぞれの記憶として残り、何でもない場所が風景に変わるような慰霊空間が、命の落ち着き場所が個人の思いによるものとなった現代の都市における慰霊空間のあり方であり、「拠点」の根本的な存在意義として、様々な場所を生むための「器」でなければならない。

10. まとめ

近代都市による問題群を抽出し、都市問題解決のための一方法を考察してきた。問題解決のためには、様々な「拠点」を計画する必要がある。以下に「拠点」整備のための要件を挙げる。

- ・東京圏の広域的・散逸的・多焦点的な特徴に対応し、都市の一部としての「拠点」構築
- ・計画対象地である街の固有性、個性を活かした「拠点」構築
- ・都市に必要な機能と自然環境保全の両立
- ・対象地のコミュニティ再形成のための「拠点」
- ・計画対象地における「過去の所産」から導き出す拠点機能

・住民の日頃の居場所となり「かいわい性」を生むための生活拠点の構築

・人々が自然や共同体とつながる「結節点」となるための公共空間の設定

・都市が故郷となるための慰霊空間の創出

・住民や来街者に対して様々な場所を生み出す「器」としての拠点

本研究では、本学部の浅野平八（元）教授、橋本緑郎教授より多大な示唆を得た。長期に渡る熱意あるご指導に、深く御礼申し上げる。

「検討資料」

- 1) 藤岡通夫, 渡辺保忠, 桐敷真次郎, 平井聖, 河東義之, 斎藤哲也, 「建築史 増補改訂版」市ヶ谷出版社 (2010) p. 221-287
- 2) 西沢大良, 「現代都市のための9か条」『新建築』第86巻11号 (2011) p. 28-39
- 3) 塚本由晴, 「建築の産業化がもたらしたもの」『建築雑誌』129巻8号 (2014) p. 10-13
- 4) 山本良一, 「1秒の世界」ダイヤモンド社 (2003)
- 5) 森裕之, 『公共施設の再編を問う-「途方創生」下の統廃合・再配置』自治体研究社 (2016)
- 6) 五十嵐太郎, 「現代建築に関する16章」講談社現代新書 (2006) p. 124-126, 218-234

「参考文献」

- 7) 川添登, 楨文彦, 「現代建築 都市空間の原点を求めて」筑摩書房 (1970) p. 109-144
- 8) 新建築社, 「東京150プロジェクト 多様な都市マネジメント」『新建築』第90巻7号 (2015) p. 144-191
- 9) 関東地方環境事務所作成, 「谷津干潟保全等推進計画所 自然と人 共に生き、安らぎ、憩う谷津干潟」関東地方環境事務所 (2015)
- 10) Adam Higginbotham, 「HALF LIFE」『WIRED』第1巻1号 (2011) p. 22-29
- 11) 国土交通省国土計画局作成, 「国土のグランドデザイン 2050-対流促進型国土の形成に向けて-」国土交通省 (2014)
- 12) 国土交通省国土計画局作成, 「首都圏をめぐる最近の動向」国土交通省 (2015)
- 13) 佐々木高史, 「写真アルバム 船橋市の昭和」いき出版 (2016)
- 14) Andrew Keen, 「Sharing in a Trap」『WIRED』第1巻1号 (2011) p. 44-47
- 15) Jane Jacobs 「アメリカ大都市の死と生」訳＝山形浩生, 鹿島出版会 (2010)
- 16) 西成典久, 斎藤潮, 「都市広場をめぐる石川栄耀の活動に関する研究」2008年度第43回日本都市計画学会学術研究論文集 (2008)
- 17) 中島直人, 「石川栄耀の都市美活動に関する研究」2002年度第37回日本都市計画学会学術研究論文集 (2002) p. 523-528
- 18) 黒澤隆研究会作成, 「黒澤隆作品抄」黒澤隆研究会 (2016)
- 19) Rem Koolhaas, 「錯乱のニューヨーク」訳＝鈴木圭介, ちくま学術文庫 (1999)
- 20) 藤井正雄, 八木澤壮一, 「日本葬送文化大辞典」四季社 (2007) p. 23-60